

中世曹洞宗切紙の分類試論(三)

——叢林行事關係を中心として——

石 川 力 山

一 はじめに

前稿、および前前稿においては、主として切紙の全体像と基本的機能を把握するための作業としての史料紹介を行った。⁽¹⁾まず、中世における切紙の種類が果して何種ぐらい存したかを探るため、江戸期のもも含めた切紙目録のいくつかを紹介して、その種類の全体像と、これが機能する範囲について考えてみた。江戸期の目録に見られるものが中世以来の伝統を持つものか否かについては、これからも検討を加えなければならず、したがって今後の課題は、現存する中世切紙の原資料を発掘して、近世の目録に照合し、その存在するものについてまず確認することにある。

また、切紙資料はその形態上、極めて散逸し易く、特に中世切紙が集成された形跡はまれであり、江戸期に見られる冊子の状態に編成書写されることは殆んどなかったと思われる

が、岐阜県竜泰寺所蔵の古写本中に、その書冊形式から考えて、中世末期か、下っても近世の初期のものと思われる、冊子形式の切紙の集成があり、その内容は、全体が問答体で展開されるといふめずらしい参話形式だけのものであり、中世切紙の全体像を論ずる上からは、極めて貴重な稀観書であると判断したので、これを翻刻して、内容や伝承に関する若干の論を展開してみた。

さて、先の稿においても、中世切紙の集成を図るためには、ある程度文類項目を立てた上で整理しなければならぬと考えたので、当面の方針として十一種の分類項目を設定してみた。それは次の通りである。

- 1 叢林行事
- 2 行履物
- 3 堂塔・伽藍
- 4 仏・菩薩

- 5 追善・葬送供養
- 6 室内(嗣法・血脈)
- 7 参話(宗旨・公案・口訣)
- 8 儀礼(授戒・点眼・臨時行事)
- 9 祈禱・咒術
- 10 神仏習合
- 11 吉凶・卜占

ここに掲げた十一種は、あくまでも当面の分類整理のために立てたものであり、したがって、論を進めて行くうちにこれを改めなければならぬ事態を全く考慮してはいないわけではないが、いくつかの集成本や切紙目録を、この分類にしたがって分類することも可能であったので、しばらくはこの十一種の分類項目にしたがって切紙の整理をしたいと思っている。

ところで、中世における切紙の伝授は、一件の事項につき一枚を原則として伝えるのであるが、その際、これが師から弟子へ一括して伝授されることはなく、数次にわたって、その切紙の枚数に応じて複数の期日の間に伝えられるのが通例である。中世切紙が散逸し易い理由もここにある。しかし、近世江戸期になると、かなりの枚数を一括して伝授する傾向が見られ、時にはこれが冊子の形で編成されるようになったことはすでに述べた通りである。ただし、冊子にまとめられ

たからといっても、内容や順序に関しては雑然としたものが殆んどで、分類整理がなされることは全くなかった。この切紙を総体的に分類整理する作業を始めて行ったのは、杉本俊龍『洞上室内切紙并参話研究』⁽²⁾で、第一章行持部、第二章点眼部、第三章送亡部、第四章血脈部、第五章嗣法部、第六章口訣部、第七章参話部、第八章加持部、第九章雜纂部の九章に分類し、百三十五種の切紙を収録したことは周知のごとくである。しかしここでは、その原資料となったものがいかなる寺院門派に伝承されたものか、その原所蔵者は何処の誰か等の書誌的問題には全く触れず、ひたすら内容だけを基準に集成分類したものである。しかも、その収録の基準は、「(前略)以上九種に分類し、その所屬を定めたのである。これは切紙に差別をつけたのではなく、その内容を明らかにしたのである。然し従来所伝のもので、ここに収録しないものが相当にあるが、それは所謂価値がないからである。本書は切紙の全集を目的としているのではなく、所伝中から揀選して編輯したのである。『譬ひ不必要であろうと、間違つてゐやうと、師匠から有難いものだ」と伝ふて、相続して来てゐるから捨てられぬ』と云ふ旧殻を脱せねばならぬ。切紙は絶対神聖にして犯すべからず、ときめてしまへば研究の余地はない。然し現存のものは誤謬があつて、この儘では信ぜられないのであるから、大いに研究する必要がある」(三二頁)と述べている

所に端的にあらわれている。つまり、ある種の価値基準を設定しておいて、これに該当しないと考えられたものはすべて切り捨てられたと言つてよい。そして問題は、この価値基準とされるものであり、それは宗旨の参究という点に集約され、書誌的・伝承史の意味での資料批判を前提としないことに最大の難点がある。要するに、研究ということを標榜しながら、その手続きを踏んでいないという矛盾である。その結果、たとえば、建保二年(一二二四)正月二日、栄西(一二四一～一二一五)が弟子の明全(一一八四～一二二五)に授与したことに端を発し、道元(一二〇〇～一二五三)を経て、瑩山紹瑾(一二六八～一二三五)が正和四年(一二三五)八月七日、永平寺住持義演(一二三四)の遺物として伝授したと伝承され、中世の原資料も多数各地に所蔵されている『荣西僧正記文』という切紙も、一顧だにされないということになる。

そもそも、切紙の伝承に関しては、その由来を出来るだけ古い時期に設定し、その権威を高からしめようとする記述が随所にうかがわれる。その伝承の根源を、道元やその師の如浄(一一六三～一二二八)の手裏にまで遡源させようと試みることも珍らしいことではない。それらが殆んど荒唐無稽な捏造であることは論を俟たないが、それが捏造されたものであるからといって、これを研究の対象から除外することは許されない。なぜなら、それがいかに道元の宗旨に合わないから

と言っても、これが中世社会の中で確実に機能した事実是否定できないからである。ある意味では、葬祭儀礼や祈禱咒術、神仏習合、吉凶・卜占といった、民衆の日常生活に直結した内容の部分が、曹洞宗の地方展開を推し進める根元的な原動力であったともいえる。⁽³⁾近世になると切紙の数も一挙に増加し、その伝承の経過も追跡できず、もはやその整理も収拾不可能となる。筆者が、中世乃至は最下限を近世の寛永期頃までの書写の切紙にこだわる理由もここにある。その最終的な目標は、切紙の発生そのものの究明にあるが、現在の段階では、とりあえず中世以来の伝承を持つと見られる切紙がどれほどあるかということが当面の課題であり、これまでの調査で得たものを、逐次分類して全体像を把握してみようとするのが本稿のねらいである。その整理のための分類項目として立てたのが、前記の十項目であり、今回はその中の第一の叢林行事関係のものを取り出して、若干の論を展開するつもりである。

二 「叢林行事切紙」とは

前前稿において指摘したように、中世切紙に対する近世切紙の全体的な特徴は、「室内(嗣法・三物・血脈)」、「参話(宗旨・公案・口訣)」、「儀礼」の三項目が激増していることで、これに対して、中世切紙の全体像をうかがうことのできる岐阜

県竜泰寺所蔵の『仏家一大事夜話』の特徴は、「叢林行事」や「行履物」に関する切紙が六十四種のほぼ半数に近い三十種を占めている点にある。このことが、時代が下るにしたがって寺院が世俗化し、また室内や各種儀礼が形式化したためであるかどうかという判断は、中世切紙の全体像の把握を俟つかないが、今後、切紙を見ていく視点の一つであることは異論のない所であろう。特に、一方では追善・葬送供養や、咒術・祈禱、神仏習合思潮との融合、吉凶・卜占の導入などを通して地域民衆の信仰生活の中に積極的に踏み込む姿勢を示すと同時に、他方においては、修道生活を基調とした叢林生活が主体的な意識の中に脈々と流れていたことを予想させるには充分である。『仏家一大事夜話』の中で、第三位を占めるのが「参話(宗旨・公案・口訣)」の八種であることも、叢林生活における具体的な修行が、参禅、すなわち公案参究であったことを思わしめ、何よりも『仏家一大事夜話』そのものが、全体として参話の形式を取っていることに象徴される。

こうした傾向がいつ頃より顕著になったかが問題であるが、長野県徳雲寺に所蔵される天正二十年(一五九二)の年記を持つ切紙目録の記載が、あるいはその中間的位置を示すものかとも思われるので、次に掲げておく。⁽⁴⁾

○切紙数量之目録

- (1) 家々之御大事、(2) 七仏伝授之大事、(3) 円相勃陀勃地

中世曹洞宗切紙の分類試論(石川)

- 図、(4) 天竺一枚紙之大事、(5) 印形未分之図、(6) 自家之訓
 訣同図、(7) 他家訓訣、(8) 作僧之切紙同儀規、(9) 普門品相
 承同血脈、(10) 大魔之秘図、(11) 三星之図、(12) 上来之話同図
 共ニ、(13) 血脈略作法、(14) 檀望仏殿礼、(15) 満字書同切紙、
 (16) 了畢之判形、(17) 勘忍之判形、(18) 拈華之図、(19) 嗣統物
 之図、(20) 嗣法之書、(21) 大儀規之大事、(22) 小儀規之大事、
 (23) 夜参盤同血脈、(24) 嗣法合血之抄、(25) 永平坐具之文、
 (26) 道元和尚一坐具、(27) 竹鼻之切紙同抄子、(28) 峩山和尚一
 枚法語、(29) 空塵書之大事、(30) 迦葉勒之三説、普灯在之、(31)
 曹洞三主君、拈花春口口旋切、紙訓訣之始終尼、(32) 文殊手裡劍、(33) 問訊之大事、
 (34) 祝聖一句切紙、(35) 大悟之切紙、(36) 血脈記墓、(37) 太白
 峯記、(38) 榮西記文録、(39) 応身之録、(40) 十則正法眼蔵、
 (41) 竜天勘破之記、(42) 竜天授戒之血脈同作法、(43) 国王授戒
 之切紙同作法、(44) 達磨知死期、(45) 仏知死期、(46) 梅花嗣書
 之切紙、(47) 松竹梅之切紙、(48) 伝語判形、(49) 宝鏡三昧、
 (50) 釈迦判形、(51) 達磨判形、(52) 三宝印之図、(53) 八句之切
 紙、(54) 宝瓶拄杖白払図、(55) 道場莊嚴之儀規、(56) 宝中洒水
 之作法、(57) 十八般之妙語、(58) 椅棹莊嚴切紙、(59) 戒文授文
 之作法、(60) 三滲漏之書、(61) 五位之図、(62) 安坐点眼之切
 紙、(63) 嗣書焼却之切紙、(64) 悉曇之切紙、(65) 達磨三心之
 図、(66) 心空之図同切紙、(67) 居士之嗣書、(68) 三国流伝之切
 紙、(69) 正法眼蔵血脈、(70) 達磨伝法之偈、(71) 永平之密語、
 (72) 血脈包話之次第、(73) 俱胝一指之話、(74) 巡堂焼香之儀
 規、(75) 七堂之図、(76) 嗣法血脈之図、(77) 心王三昧、(78)
 隱身三昧、(79) 嗣法論、(80) 達磨頌歌、(81) 生死事大安樂之

図、(82)小蔵之誰切紙、(83)三宝印之切紙、(84)錦囊之図、(85)袈裟囊之図、(86)那時三人之図、(87)曹洞機之大事、(88)摩頂手護^(守)、(89)菩薩戒之作法、(90)頂門之眼一中十位、(91)涅槃之作法、(92)三界之図一句之切紙、(93)山神授戒之切紙、(94)水神授戒之切紙、(95)住吉五ヶ条、(96)血脈鉄漢、(97)命脈之一点、(98)取骨之切紙、(99)十界之切紙、(100)衣鉢血脈伝授作法、(101)曹洞旨訣五大老切紙、(102)白紙之切紙、(103)心水枕之切紙、(104)鎮守之切紙同白山切紙、(105)一辺消災咒之切紙、(106)山門之切紙、(107)舍利之切紙、(108)性之参同灰之大事、(109)曹洞二柱作無作参、(110)樹上之切紙、(111)万機休罷同当头始末、(112)円覚再居、(113)六外之一句、(114)不識上之機縁、(115)夜参廿八透目録、(116)山居之図、(117)入棺作法、(118)三悟道切紙、(119)那時淵底、(120)最極参上之切紙

以上百廿通、天童如浄禅師伝附而永平和尚嫡々相承到今日、伝来子孫一人可得、可秘々々

玆歲天正廿^{辛卯}九月日

傑心盾英謹書

(原本は横紙に各切紙一行ずつ列記してあるが、ここでは追い込みにした。番号は整理上便宜的に付したものである)

この切紙を所蔵する徳運寺(長野県松本市)は、岐阜県竜泰寺の門葉で、華叟正萼(一四二二〜一四八一)派下の三派(長野大沢寺絶方祖裔、栃木大中寺快庵妙慶、群馬茂林寺大林正通)の中の、大沢寺派下大安寺の末寺であるが、⁽⁵⁾識語者傑心盾英は、同じく華叟派下大中寺末傑岑寺の僧であらうと思われ

る。また、天正二十年(一五九二)の干支辛卯は実際は壬辰であり、この点については疑問が残り、あるいは再写本かとも思われるが、同寺には天正・文禄・慶長期の切紙も所蔵されており、その意味からも重要な目録と思われる。そして、通例の如く、これらもすべて道元が如浄より参得相承したと記されるのである。これを分類項目によって整理してみると次のようになる。

- 1 叢林行事 (14)(23)(34)(74)(105)
- 2 行履物 (25)(26)(27)(54)(56)(84)(85)
- 3 堂塔・伽藍 (75)(106)
- 4 仏・菩薩 (32)(107)
- 5 追善・葬送供養 (91)(98)(117)
- 6 室内(嗣法・血脈) (2)(3)(5)(6)(7)(9)(13)
(15)(16)(19)(20)(24)(29)(36)(37)(46)(47)(48)(49)
(50)(51)(52)(63)(67)(69)(70)(72)(76)(79)(83)(88)
(96)(97)(100)
- 7 参話(宗旨・公案・口訣) (1)(4)(12)(17)(18)(28)
(30)(31)(33)(35)(38)(39)(40)(44)(45)(53)(57)(60)
(61)(64)(65)(66)(68)(71)(73)(77)(78)(80)(81)(86)
(87)(90)(92)(99)(101)(102)(103)(108)(109)(110)(111)(112)
(113)(114)(115)(116)(118)
- 8 儀礼(授戒・点眼・行事) (8)(21)(22)(42)(43)(55)

(58)(59)(62)(89)

9 祈禱・咒術(ナシ)

10 神仏習合(11)(41)(93)(94)(95)(104)

11 吉凶・卜占(ナシ)

これらの分類に際して、二項目、あるいは三項目に亘るような場合もあって、必ずしも厳密を期し難いことは前稿においても指摘したところであるが、全体を一瞥してみれば、およその傾向は察せられる。すなわち、室内や参話の項が著るしく多くなっていることは明白である。特に参話の中の公案禅関係切紙については、これを別出しなかったが、「夜参廿八透目録」とあるように、ここではその目録のみであったとみられ、これ以外に門参として別行されていたであろうことが推測される。

このように、室内や参話に比重が傾いていることは明らかであるが、叢林行事や行履物の項目も決して少いわけではなく、その意味において、やはり修道生活を中心とする古叢林の面影を髣髴させる部分も存する。すなわち、叢林行事関係切紙は、檀望仏殿礼、夜参盤同血脈、祝聖一句切紙、巡堂焼香之儀規、一辺消災咒之切紙の五種である。また、先に紹介した『仏家一大事夜話』では、勤行(三時の行事)、観音経ノ読誦、日中祈禱、日ノ晩ルル行事(放散)、四時ノ坐禅、御影堂前ノ法花経読誦、祝聖之参、鐘鼓之参、尊客ノ時勤行止ム

ル心、小開静ノ参、大開静ノ参、土地堂団子^{ダンシ}供羊の十二種である。徳運寺所蔵の切紙目録に記載された切紙がすべて現存するわけではなく、また竜泰寺所蔵の『仏家一大事夜話』は、すべて参話形式で記載されているという特殊な形態をとっており、これに対応する切紙本来の姿がすべて確認出来るわけではないが、次に、中世以来の伝統を有することが確認出来る叢林行事関係の切紙を紹介してみる。

三 「祝聖切紙」について

祝聖とは、聖節すなわち国王の誕生日に、聖寿の無窮を祝禱する儀礼のことで、『百文規繩頌』にもすでに、

一、遇開啓聖節道場、或欲起離雲遊、須候一次上殿看経、方可前去、無自軽易

(『禅苑清規』卷十、鏡島元隆等訳註本、三五九頁)

とあり、特別な行事とされ、藏殿に登って看経していたことが知られる。さらに『勅修百文清規』になると、卷上の冒頭に「祝釐章」が設けられ、聖節、景命四齋日祝讚、旦望藏殿祝讚、毎日祝讚、千秋節、善月の各項の定めにより、誕生日ばかりでなく、旦望と八日・二十三日の四齋日、月の一日と十五日、毎日の齋粥の二時等に、国王の平安聖寿無窮と国家の昌平を祝禱することが慣例となった。特に一日と十五日の所謂る旦望には、祝禱上堂も行われ、道元もこれを行っ

ていたことが『永平広録』の記載によって知られる。『瑩山清規』はこれをさらに詳しく定めて、月中行事に位置付け、

一日、粥時維那白槌云、稽首薄伽梵、円満修多羅、大聖菩薩僧、功德難思議、又云、今晨修設五味粥或云、淨粥、一堂、奉為今上皇帝聖寿無疆、仰憑尊衆念、十仏名如常、粥罷鳴鐘三會、就大殿諷經、或立今上皇帝牌於正面主位、主人仏前三尊焼香了、帰本位当面礼中尊三拜行者若侍者、展三拜席、拜了収三拜席後、維那諷經、大円満咒一遍、消災咒三遍、大衆合掌誦、不著頭帽、消災呪始回向始、俱主人焼香、三尊仏前如法莊嚴、大衆慙重惶恐、是常礼法也、不可聊爾、次小師等礼主人、粥罷祝聖諷經後、侍者小師等上寢堂、請出主人一令着椅、頭侍者一人焼香礼賀、大展九拜也、次参学小師、或法属礼賀、若有答拜、或入室小師焼香九拜、若出世小師、不群礼拜也、次沙弥童行、或尼衆礼賀、若俗弟礼賀、次上堂、恐祝慙重、賀謝如法、云云

と、祝聖諷經、且望上堂(朔望上堂)の行法を規定する。さらに回向文については、

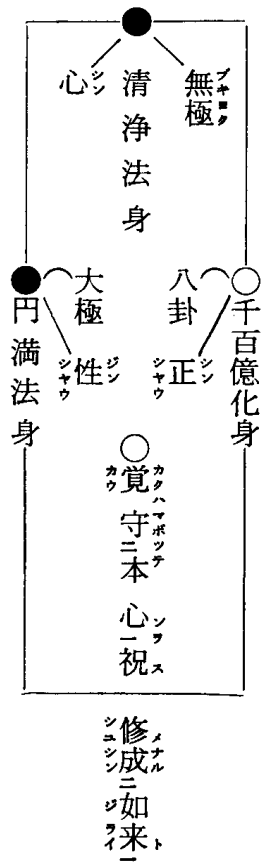
祝聖諷經回向 朔望

心性正覚、大智海蔵修成如来、円通聖衆、和光同誦、大円満無礙神呪消災妙吉祥陀羅尼、所集鴻因、恭為祝延、今上皇帝聖寿無疆、無量寿仏、諸尊菩薩、摩訶薩、摩訶般若波羅蜜 (同前、四四三頁)

と定めている。

祝聖切紙とは、この祝聖諷經の意味や焼香の方法について

の秘訣を伝えたもので、たとえば永光寺切紙の「祝聖之切紙」によれば、



心者法身、性者報身、正者化身也、無極共大極共混沌共、未分処祝也、覺者、祝無心也、無心本心也、回向無量寿仏祝也、寿仏本心也、生死無碍一仏也、畢竟心仏心王无量寿仏三體也、大悲呪前焼香、消災呪時焼香、過焼香、三度也、祝聖焼香一炷三転也、三点一炷中点、香三度也、所謂三々九也、心、天帝位者、当飛竜九五卦一故也、見易、一炷三点中、黙禱云、今上皇帝玉牀安穩、三唱、時寅一点也、大衆普同問訊、仏法王法一致也、早朝諷經、住持祈禱也、一返消災呪、法衣祈禱也、就先祖法衣有ニ多難一故也、無回向、無始無終無断絶心也、日中住持祈禱也、無燈、心南方火徳神守護祈禱故也、有参禪大夏、坐禪除四相、放参其日逃ニ惡衰災難、総而諸行事、為除貪慎痴三毒也、本尊与住持ニ眼々可ニ相對、本尊左眼、維那左眼可ニ相對也、師云、宗門有祝聖句、祝聖句、拳、大円満テ走、師云、何トテ十方三世ヲバ云ワヌゾ、拳ス、ドツコモ今上皇帝膝下呈ニ、何ガ別ワ申シ走ベイ、

化身（シツクリ）片作不レ離吉（三久）法身（獅子ノ尾ノ如シ）万支出生
 法身（報身）山門（報身）修正（化身、故ニ草ニ書ク）祝聖（秘伝云、一切唯心造）満散（秘伝云、一切唯心造）火（首不レ出）

首（カシラ）不レ合（セ）合（ア）人亡（ヒト）ヨム也（ホロフ）
今上皇帝 **檀那** **菴** **庵**
（是吉ヒトアエズトヨム）
（マヲ、シムトヨム）

火字（ハカシラ）首出（イデ、モ）不レ苦（ク）片陰（カタ）水也（ミヅ）、作（ツクリ）陽火也（ヨウカ）、故筆方（コノヒツカタ）ハ子ズ、
 火防（ヒ）ベキ也（ベキ）、火（ヒ）火（ヒ）

祝聖之切紙、代々如レ此秘伝也

東察（花押）

心性正誦三調子也

附与 娘良首座

というものである。この切紙を附与された娘良首座は、大乘寺二十一世超山閻越（一五八一〜一六七二）の法嗣で、永光寺輪住四百七十六世久外嬭（吞）良（一六五）のことであり、が、附与者東察は宗竜寺二世明菴東察のことで、もと師弟関係にあったものであろう。永光寺所蔵の切紙には、慶長・元和・寛永期のものに、この嬭良相承のものが多く見出される。ところで、切紙には本文の外に、これを図で示したものと、さらに大事あるいは参禅と称してその口訣を問答体で拈提したものが付随することがある。⁽⁶⁾すべての切紙がこの三種の部分よりなるとは限らないが、永光寺所蔵の祝聖切紙は、同一紙の中にその三部分をすべて含んでいるという、珍らし

いものである。すなわち、まず、法身・報身・化身の三身についてこれを図で示し、次に切紙の本文に対する注釈を展開し、口訣を参話の形で示し、さらに「山門修正祝聖満散」の榜や、仏殿の須弥壇上の本尊前に安置する三牌の書き方まで示すという詳しいもので、このような祝聖切紙はあまり他に例を見ないものである。

内容は、『瑩山清規』の祝聖諷経回向文の注釈ともいうべきもので、心・性・正を仏の法・報・化の三身になぞらえ、また大悲呪や、消災咒誦の際の焼香の仕方とその意味、諷経の時刻、住持や維那の本尊に対する相對し方等について、その意味するところを端的に示したものである。

この永光寺切紙のように、図と大事を俱にそなえ、さらに榜や牌の書式まで示したものはあまり伝授されなかったものと思われる。たとえば、卍山道白下の桂岩孝道なる者が伝えたとされる、駒沢大学図書館所蔵の『室中切紙』巻一の「朔望祝聖回向切帋」によれば、

心性正覚仏宝、大智海蔵法宝、円通清衆僧、三宝和光諷誦(秘カ)和
咒、祝延帝寿足酬護法、至回向終、三宝總念三句文中、除十方
三世一切仏、单拳金剛無量寿仏者、用テ表祝寿也、或家有祝聖
回向大事、祝聖回向図等之切紙、併是後人私祝全家伝決不可信
用也、右嫡々相承至今(6ウ~7オ)

とあり、これが一般に伝えられる祝聖切紙の全文であるが、
ここでは極めて簡潔な記載となつてゐるのが知られる。そし
て、祝聖回向の大事やその図を伝えている切紙も存し、これ
は信用すべきものではないとするが、これらを具備した代表
的なものが永光寺所蔵の「祝聖之切紙」である。

永光寺所蔵の「祝聖之切紙」には、また、諷経中の焼香の
仕方もあわせて詳しく記載されているが、この焼香の方法だ
けを別出して相承された切紙もある。三重県広泰寺所蔵の
「祝聖焼香切紙」によれば、

祝聖焼香

洞谷山永光大禪刹從_レ瑩山和尚_ニ至_レ四門跡_ニ嫡々相承、至_レ今每_ニ
朔望_ニ於堂前_ニ鳴鐘_ニ一会之間大衆集来、到_ニ二会_ニ紀綱入_レ堂、到_ニ
三會_ニ住持出_レ室、堂前而向_レ外、低声云、天下泰平、福寿安寧、
其後左足_ヲ入_レ闔、立_ニ中央_ニ、低声云、天地同根、万物一躰、揖
而進前、右手拈_ニ焼香_ニ曰、震巽離坤兌乾坎艮、又左手弁_レ香曰、
艮坎乾兌坤離巽震、云了、則問訊曰、今上皇帝聖寿万歳、其後
退_ニ後中央_ニ三拜、亦進前供_ニ洗米_ニ、三拜揖、其時鳴_レ磬、大悲神
咒、始、大悲神咒末到_ニ婆耶摩那婆婆訶_ニ、鳴_レ磬、其時進前焼香、

唱_ニ君臣合道_ニ、退後_ニ消災咒_ニ三返目始、鳴_レ磬、進前焼香、是回向
之焼香也、是主之作業也

とあり、祝聖諷経における住持の進退や唱える偈文について
までもすべて記され示される。

この祝聖焼香切紙には年記識語等が全く無いので、その伝
承等については不明であるが、その書写は恐らく江戸中期頃
まで下るものと思われる。

さらに、永光字切紙では、簡単な参話しか見出されな
いが、前号で紹介した『仏家一大事夜話』によれば、

△祝聖之参、師云、祝心ノ道理アリ、一句道へ、云、心王ノ本
命元辰ヲ祝_レ走、師云、心王ノ収メ羊ヲ、云、廓然無聖真俗不
二ノ処ヲ収_レ走、師云、釈迦ハ何ントテ王ノ祈念ニ祝聖ヲバ誦
シタソ、云、仏法王法一致ナ呈ニ誦_レ走、師云、心王ノ収マリ
羊ヲ、云、極無心ノ処ガ心王ノ収_レリテ走、云、亦無相無念ノ
時、只一心テ走、師云、焼香ノ大夏ヲ、云、五薫香テ走、五分
法身香ノ夏へ、喚_レ何五分法身香トハナシタソ、云、戒香定香
惠香解脱香_(解脱)睥脱知見香テ走、師云、薫シ羊ヲ、云、尽天尽地此
ノ薫香テ拄_レヘテ走、師云、薫シ羊ヲ、云、坐禅定力ノ時、不断
薫シテ走、師云、焼香ノ時、香ヲツマンテ円相ヲナシテクブル
理ヲ、云、上界ノ諸天声聞縁覚仏并神祇冥道下界ノ竜神我鬼畜
生修羅人天尽ク一炉ニ収ウカ為メテ走、師云、畢竟ヲ、云、徹
底無念ノ時、法身ノ全体テ走、

(4ウ)

とあり、祝聖諷経を修する意味を、王法仏法の一致としてと
らえ、さらに焼香の大事についても拈提を加えるというもの

である。これは『室内切紙』で批判する、図と大事を併せたものとは異なるもののように、参話だけが独立して別行されたものと思われる。

このように、祝聖切紙については、図だけの別行本は見当たらないが、『仏家一大事夜話』の参話を別行本とみれば、「祝聖之切紙」「朔望祝聖回向切紙」「祝聖焼香」「祝聖之参」と四種類の切紙が存することになる。また、永光寺所蔵の「祝聖之切紙」には、住持の本尊に向つての相對し方が記されると同時に、維那の場合も記されているが、維那を中心とした切紙には、永光寺所蔵の近世初め頃と推定される「維那行夏之次第大事」があり、これには、

第一祝聖ト者、帝王御祈禱也、回向ノ誦之拙、息ノツキヤウ、足ノ踏拙肝心也、心性正覚ト三ツ、クルワ三也、三内処ヲ見ル、扱テハ混頓未分所也、爰ヲ出ツレバ、心性正也、勤メテワ寺衆住持一等ノ祈禱也、総ノ祝聖、花松、洗米ノ供ジャウ、礼拝ノシャウ、肝心一辺消災呪ハ法衣ノ祈禱ナルニヨリ、無_ニ回向_ニナリ、故住持一円相以歩ノ肝心トス、此心ワ、無始無終、無_ニ断絶_ニ事也、是ハ投子去身始ムル、如_レ此的師心得ルナリ、云云

と、祝聖の際の維那の心要が説かれる。これも、祝聖切紙の関連のものとして位置付けてよいであろう。

さらに、永光寺所蔵の「仏前焼香之儀式」と題する切紙も、

仏前焼香儀式

右唐太宋宝慶元年丁亥九月十八日、明州天童景德禪室堂頭如淨、附道元畢、伏乞、

謹奉祝延、本尊正面三足思惟耳、。焼香、戒香定香惠香解、脱香解脱知見香、退位

合掌、展坐具大展三拜、三々九拜中、誦唱、三帰依、上来七

仏、我本師釈迦牟尼仏大士薩埵、大慈大悲广大靈感觀世音菩

薩、大転輪王、小転輪王、靈台周遍法界供養等、無二無別無断

故三拜功德、一拜為先天地先真仏祖、二拜三国伝灯之仏祖、三

拜今天地間今上皇帝上窮万歳、万々歳、乃至上界諸_天下界諸

神、八大金剛、四大菩薩扶桑、國中、皆来聚会、広沢比丘、摩訶薩、摩

訶般若婆羅蜜、可誦一遍消災呪、即無始無終無断絶儀々

謹奉誦祝聖旦望、開法元正啓祚、每月每日小尽廿九大尽三十日莫怠慢

者也、

永平開山道元和尚、二代懷奘、大乘開山義价、当山開山紹瑾、

二代峨山、無際開山以来至今、猶々相承而到于吾、吾今附上広

沢長老畢、

仏子住此地、即是仏受用常在其中、経行若坐臥畢、

臨_ニ仏殿_ニ二拜礼_ニ天地_ニ義、先登_ニ脚躓_ニ時礼_ニ脚達_ニ、其時脱_ニ片

履_ニ、是分礼_レ地_ニ、脚躓登_リ了_テ、礼_レ天、其時冠_ニ衣_ニ、是分礼_レ天

登_ニ道場_ニ時、於_ニ敷居_ニ限_ニ二拜_ニ、

仰山昼鈎鏡素統相曰、問者鈎鏡、答者素統以_レ鉄曲成是鈎言銘

無_レ舌鏡言、

というもので、明らかに祝聖焼香の切紙であり、これも道元より伝来したものとされる。

従来、切紙の伝授は曹洞宗の各派において行われて残され

ているが、それら各派の切紙は機を一にして同内容のものが伝えられていたとされる。⁽⁷⁾しかし、それは近世江戸期になつてから、ある意味では集成の傾向が著るしくなる江戸中期以降のものに限って見た場合に言えることであつて、中世のそれに関しては、決して画一的には捉え切れない側面を有していることは、これまで見て来た祝聖切紙の一例をとつても理解されよう。

四 「三時行事切紙」について

祝聖諷經と同様に祈禱的性格の強い諷經として、三時の行事、すなわち三時諷經がある。三時諷經の発生については、面山瑞方も『洞上室内断紙棟非私記』⁽⁸⁾に、

三時諷經断紙

面山謂、三時諷經從中古起、共有二回向、主人大衆共可觀回向旨趣⁽⁹⁾、此断紙謂、粥了大衆等祈禱、參後当日除災祈禱等者、無益之口訣也、可附棟非⁽¹⁰⁾、

(『曹全』室中、二〇五頁)

と記しているように、道元の時代には行われなかつたものである。特に粥罷に諷經して衆僧の現世利益を祈願する行事は、永平寺三代徹通義介(一一一九～一三〇九)にはじまるともされるが、これを明確に規定したのは『瑩山清規』で、まづ粥罷諷經については、

如遇⁽¹¹⁾祝聖諷經⁽¹²⁾者、雖不⁽¹³⁾打⁽¹⁴⁾三下鐘、必打⁽¹⁵⁾鐘三會、就⁽¹⁶⁾大殿諷經、粥罷大衆随意諸堂燒香、

(『曹全』宗源下、四三六頁)

とあり、日中諷經については、

午時齋時也、火鈴遶⁽¹⁷⁾寺後、庫前鼓三下、報⁽¹⁸⁾齋時⁽¹⁹⁾也、次鳴⁽²⁰⁾大鐘二十八声、是称⁽²¹⁾齋鐘、此間就⁽²²⁾大殿誦⁽²³⁾尊勝陀羅尼⁽²⁴⁾七遍、是云⁽²⁵⁾日中、

(同右、四三七頁)

とある。また哺時參後の諷經については、

酉時(中略)粥罷衆寮問訊次云、和尚放參、次大殿諷殿、打⁽²⁶⁾鐘一會、或三會、隨⁽²⁷⁾主人意、或楞嚴咒、長日或大悲咒、消災咒、夏中其後歸寮問訊、參後參前詣⁽²⁸⁾諸寮、必搭⁽²⁹⁾袈裟、是常儀也、

(同右、四三七～八頁)

とある。この三時諷經について、通常伝えられている切紙は、上記の駒沢大学図書館所蔵の『室中切紙』(一)によれば、

三時諷經切紙

居常日々粥了日午參後之三時、諷誦經咒回向一切三宝諸天鬼神、諸伽藍神大小諸神祇、山門鎮靜檀門繁昌、弁道安穩諸緣吉利、且粥了時誦一返消災咒、別祈山門繁昌衆造無難⁽³⁰⁾、於日午又誦一返消災咒、別祈檀門繁昌施主無難、三時用心同貴純一至誠尊注專念

或家言、粥了大衆一等之祈禱、一返消災咒、法衣祈禱、日午住持人祈禱、參後当日除災之祈禱者、是又一伝也、然未必如此也、

(7ウ)

とあるもので、これも江戸期の切紙に関して見るなら、殆んど異なる内容を持ったものは見当たらない。ただし、注意したいのは、「或家に言う」として後半に附記された多少趣を異にするから見られる「三時諷經切紙」で、「是れ又一伝なり」とあるからには、恐らく派を異にする伝承切紙を指していると思われる。そして、これに相当すると見られるのが、埼玉県正竜寺に所蔵される切紙の中に存する「日用行事作法祝聖切紙」である。これもやはり道元がこれを伝え、永平寺の室中に相承されたものであるとされるが、それは次のようなものである。

日用行事之作法

道元記

大宋仁治元年辛丑三月廿八日夜半伝之

先祝聖者、王祈禱也、心性者無極也、正心者混沌也、無極共混沌共未分共、収以祝也、性者此心祝守也、畢竟回向之心者、無量寿仏祝也、仏心王無量寿仏也、大悲咒之前焼香畢、消災咒之時、亦過時焼香回向焼香也、早朝大衆一等之祈禱也、一返消災咒者、法衣祈禱也、是先祖法衣多難有故、

聖

為除之咒也、無回向、無始無終、無斷絶境也、日中者住持祈禱也、維那住持腋之可始、無燈者日中者南方火徳元神之守護之祈禱也、放散者難遁也、惣而三時之行事、為除貪瞋痴三毒、伝此法一主之統領成也、

先本尊三拜、次左手焼香二柱、君臣合道唱也、能護持、

從永平室中直伝

詔堂拜

この切紙を所蔵する正竜寺は、越生龍穩寺の末寺であり、

中世曹洞宗切紙の分類試論(一)(石川)

また詔堂は同寺九世普満紹堂（一六〇一—一六七六）のことで、永平寺二十九世・龍穩寺二十二世鉄心御州（一六六四）の法嗣である。この切紙も、鉄心より伝授されたものであり、「從永平室中直伝」とあるから、鉄心の永平寺住持以後の伝授であろう。そして、仁治元年三月二十八日に道元が自らこれを伝えたこと明記している点などは、明らかに道元伝来の相承物としてしようとしている意図がうかがわれるが、「大宋」などと記している所にすでに捏造の痕跡を露呈している。恐らくこの年時は、従来如浄との初相見の年とされている「大宋宝慶元年」の連想であろう。内容は、まず、祝聖諷經の回向文の解説にはじまり、焼香の方法にも及ぶが、これは上記の「祝聖諷經切紙」の一部をなすものであり、このように三時諷經とともに祈禱諷經として一括して示された切紙もあったことが知られ、上記の祝聖切紙にもう一種を加えることができよう。

この祝聖諷經と同様の祈禱行事として扱われるのが、早朝大衆一等の祈禱、すなわち法衣祈禱としての一返消災咒、日中の住持祈禱、晡時参後の祈禱の三時諷經であり、これは、別派の一伝であると『室中切紙』が伝える或家の言う所の切紙の内容そのものである。しかも、この切紙では、三時諷經は貪瞋痴の三毒を除かんがために修されるとするが、このような受容の仕方は『仏家一大事夜話』の「勤行（三時ノ行

事)」にある、

師云、勤行ノ二字、先ツ勤トハ何ヲツトメタソ、云、識情ヲ犯サズ塵勞起サズ、時々ツトメテ走、師云、行ヲ云へ、云、坐禅修行怠タラヌカ行テ走、師云、落居ヲ、云、無心無念カ勤行ノ畢竟テ走、臥輪ノ修行ナリ、師云、何トテ三時行時トハ云タソ、三時ノ定メヲ、云、過現未ヲ一致ニ觀念スルニ依テ三時ト定メテ走、其ノ落居ヲ、云、徹底無心無念ノ時、法報応ノ三身ガ一ツニ皈シテ走、師云、畢竟ヲ、貪愼痴ノ三毒ヲ除カン為テ走、

(1オ)

という参語に正しく相応する。『仏家一大事夜話』の本則や切紙の本文については、個々の項目について検討されなければならぬが、「勤行(三時ノ行事)」に関する切紙の本文は、通常の「三時諷経切紙」ではなく、『室中切紙』がやはり批判的に見ている、正竜寺所蔵の切紙に見られるような三時の行事を内容とするものであったことは明らかであり、このことから見ても、切紙の内容は各派が殆んど同一であったとするような結論にはやはり達し得ない。

この三時諷経に関連して、また別行の切紙がある。すなわち、徳運寺所蔵の切紙目録にも記載される「一返消災咒切紙」であり、やはり中世以来の伝承を有する切紙と思われる。中世書写の当該切紙はまだ収集していないが、永平寺三十世で、前記の鉄心御州の法嗣、光紹智堂(一六七〇)所伝の切紙を騰写した、駒沢大学図書館所蔵の冊子本の『室内切

紙騰写』によれば、次のようなものである。

一返消災咒切紙

先当胸合掌身心一如ノ相ヲナシ、向ニ仏前ニ南無消災熾盛光王如来ト念、光明灌頂ノ相ヲ存シ、怛姪吒唵ノ処ニテ維那ノ小磬一声ヲ聞テ、左足ヨリ進ンテ卓前ニ至リ、咩々ノ処ニテ右足ニテ踏止マレバ、左右合ノ十二歩ナリ、卓前ニテ香ヲ拈シ、炉ニ向ツテ一円相ヲ打ノ焼香シ、嚩囉入嚩囉ノ処テ轉身ノ外ニ向ヒ、底瑟吒々々々ノ処ニテ左足ヨリ進ンテ本位ニ皈リ、袈發吒々々々ノ処ニテ右足ニテ踏ミ止マリ、扇底迦ノ処ニテ轉身シテ仏前ニ向ヒ、合掌ノ手ヲ以一円相ヲナシテヨミ収ル也、如レ前進テ本位ニ皈レバ、往来ノ間自然ニ一円相ニナルへ、焼香ノ時ノ円相ト収メ派ノ円相ト共ニ三円相ヲ得テ心ノ三点ヲ表ス、進モ十二歩、皈モ十二歩、流転還滅ノ二種ノ十二因縁ノ数ニ当ル也、全体現前シ、尽十方遍法界一時ニ光明三昧ノ中エ円撰シ、消災吉祥ノ功德ヲ蒙ラシムル者、是一返一心ノ然ラシムル也、愍重ノ想ヲナスベシ、軽忽ノ念ヲ存スルコトナカレ、

嫡々相承而永平室中今尚如此

(47ウ、48ウ)

この「一返消災咒切紙」は、『消災妙吉祥陀羅尼』を一回読誦する間に進前焼香して帰位するまでの歩の運び方、焼香の仕方等についてやや詳しく書き記したもので、これについてはまだ異種の切紙は発見していない。なお、この祈禱には回向が無いが、先の正竜寺所蔵の「日用行事作法祝聖切紙」によれば、それは無始無終無断絶の儀を意味すると解され、これは永光寺切紙の中の「仏前焼香儀式」にも通じる。

なお、この切紙にはさらに別に記文並びに口伝が存し、『室内切紙騰写』では、記文と口伝は別個のものとされているが、永光寺所蔵の久外嬢良所伝のものはこれを一緒にして大事口伝としている。

次にこれを掲げておく。

一返消災咒之那行那步之大夏口伝在之、伏以三世諸仏有ニ加護
四時無災、八節有ニ悉消滅、降三諸天長遊、功德常口此咒誦
者、吉祥如意也、若此咒須臾不措、常誦者、願望可ニ満足也、
曩莫三満多 過去現在未來之諸仏也

母駄喃 清浄法身毘盧舎那仏名号也、

阿鉢羅 盧遮那仏之眷属也、

賀多舎 不動之眷属也、

婆曩喃 本師釈迦文仏也、

怛姪他唵 一切聞鬼神此唵字、悉皆合掌受三仏言也、
亦聽三仏言トモ

亦聽三仏言トモ

法法 文殊菩薩之眷属也、

法呬法呬 普賢菩薩之眷属也、

吽吽 降三拾八宿九曜之諸仏也、
授トカク也、二十八トモ
ト大過トモノアイダ也、
師資トモ名ヲカキ附

大通智勝仏之眷属也、

入嚩羅 入嚩羅 一切香花自在仏之眷属也、
亦一切皇仏ノ眷

嚩羅入嚩羅 屬トモ、

底瑟吒 弥勒菩薩之眷属也、

瑟致哩 八万四千之金剛之名号也、

中世曹洞宗切紙の分類試論(石川)

袈發吒 金剛菩薩之眷属也、

扇底迦 降障菩薩執金剛童子也、

実哩曳 妙吉祥菩薩之名号也、

娑婆訶 熾盛光仏之本尊之名号也、

右此咒、日三度誦誦者、諸悪々悉除如意可満足也

量山(花押)

附授嬢良畢

この切紙の前半が口伝であり、後半の咒の文にそれぞれの仏・菩薩及びその眷属を配する部分が記文である。

五 おわりに

以上、叢林行事関係の切紙のうち、本稿では祝聖諷経および三時諷経の、祈禱関係の切紙を集めて、異種の切紙類と比較しながら検討を加えてみた。これらを通してみただけでも、江戸期になって各派の切紙が統一的に画一化されるに先立って、種々の形態のものが存したことが知られる。また、別派の切紙類にも同一旨趣の切紙が存することが確認できる。今後の問題は、さらに多くの切紙資料を発掘し、その比較検討を通してその成立過程を明らかにすることであろう。この稿を計画した当初は、かなり安易な考え方で、殆んどを資料の翻刻と解題で済ませられるものと思っていたが、一つの切紙が定着した形で全国的規模で統一的に流布するに至る過程は、かなり紆余曲折があることが予想される。したがっ

て切紙資料全体にわたる集成の見通しは、現在の所殆んど立っていないといってもよいが、これからも継続して、出来るだけ詳細な検討を加えて行きたいと思っている。

次回は、本稿で検討し切れなかった、叢林行事の残りの部分について考えてみたい。

注

- (1) 拙稿「中世曹洞宗切紙の分類試論(一)」(『駒沢大学仏教学部研究紀要』四十一号、昭和五十八年三月、同「中世曹洞宗切紙の分類試論(二)―竜泰寺所蔵『仏家一大事夜話』について―」(『駒沢大学仏教学部論集』十四号、昭和五十八年十月)参照。
- (2) 杉本俊竜『洞上室内切紙并参話研究』(昭和十三年七月、滴禅会刊)。
- (3) 圭室諦成『葬式仏教』(昭和三十八年十一月、大法輪閣刊)は、中世曹洞禅者の語録を分析して、一二〇〇年代の前半、つまり道元の時代には一〇〇パーセント坐禅中心であったものが、一三〇〇年代には葬祭に方向転換をはじめ、一四〇〇年代には、ほとんど一〇〇パーセント葬祭宗教化しており、このような転換によって曹洞宗は、臨済宗よりも、郷村の宗教として多幸な前途を約束された、と結論する。十五世紀以降の曹洞宗において、坐禅が全くなされなくなったかどうかは早急に結論を出すわけにはいかないことは、中世洞門関係の抄物の資料の検討によって明らかであるが、葬祭宗教化と曹洞宗の地方展開に密接な関係が存することは事実である。
- (4) 長野県徳雲寺所蔵の切紙については、前稿の永光寺切紙と同様に、国学院大学教授金田弘先生より資料提供されたものである。
- (5) 拙著『美濃国 祥雲山 竜泰寺史』(昭和五十五年、岐阜県竜泰寺刊)参照。
- (6) 徳運寺所蔵資料には、「一大事目録」として、五十七通の目録が遺存する。
- (7) 杉本俊竜前掲書、一三頁。
- (8) 面山は切紙を「断紙」と称し、これら切紙類は殆んどが中世の代語者等の誑惑の所説であるとしてこれを否定し、『洞上室内断紙揀非私記』を撰して、一四五種の切紙を逐一揀非に付すべきものと主張する。
- (9) 『三袒行業記』の義介伝に、懐奘の命を承けて京・鎌倉の禅林を視察し、さらに入宋して彼の地のそれを巡回して永平寺に帰り、堂塔伽藍と行儀の整備に尽したとして「四節礼儀、初後更点、粥罷諷経、掛塔儀式等礼法、悉師所ニ調行一也」(『曹全』史伝上、八頁)とある。佐橋法竜『瑩山』(昭和四十九年十月、相川書房刊)一五頁参照。